校長室だより～燦燦～ №９８７

露天

2024.3.5

自分は、あまり人から話しかけてもらえないタイプの人間だと思っている。いつも考え事をしていたり、むずかしい顔をしていたり、笑顔が少ない。

だが、なぜか話しかけられる場所がある。露天風呂である。なぜだろうか。ついついリラックスしているからだろうか。話しかけられるのはいいのだが、どこで切り上げて、露天風呂を後にするかがむずかしい。

こういったシチュエーションでは、話は聞いているに限る。とはいっても、聞いているだけでは申し訳ない。そこで、気を遣って質問などしようものなら、話はまだまだ続く。そのうち、こちらのプライベートにまで話が及んでくる。どこに住んでいるのか。何の仕事をしているのか。次から次へと質問が飛んでくる。

話を聞いていると、参考になることもある。そのため、決して嫌だというわけではない。たいていは、その温泉の常連さんである。きっと、その度ごとに、いろいろな人に話しかけているのだろう。私も、選ばれた一人である。

露天風呂での私は、解放感、充実感、満足感に満たされ、自分ではわからないが油断だらけなのであろう。だから、話しかけやすいのかもしれない。温泉内を見渡す。どちらかというと、話しかけづらい人の方が多いように思う。

単身赴任のときには、「単身赴任で〇〇にいるんです」と答えやすかった。ところが、これで質問は終わらない。どんな仕事をしているのか。この質問がくると、答えに窮する。教員という身分を明かすには、多少の勇気がいる。それも、教頭や校長である。余計に言いづらい。相手の方は、１００％、こちらを教員だとは思ってはいない。加えて、教頭や校長には見えないという問題もある。説明を要するときがある。いつぞやは、公務員という便利な言葉でごまかしたこともあった。ところが、追及の手は緩まなかった。さらに突っ込んで聞かれることとなった。

一人で、ゆっくりと露天風呂に浸かりたいこともある。だが、話しかけられるのもわるくはない。きっと、露天風呂という開放的なロケーションがいいのだろう。もし、私が、もう少し年を重ねていけば、露天風呂で見知らぬ人に話しかけるようになるのだろうか。どうも想像ができない。現在のところ、話しかけるようになるとは思えない。

だが、人はわからない。人は変わるものである。私が、露天風呂で話しかけるようになっていれば、それは、だいぶ変わったということである。そんな自分になるかどうか楽しみでもある。